

発達検査と対人援助学

⑱ 第 16 回年次大会事務局日記

大谷多加志

去る 2024 年 11 月 2 日（土）・3 日（日）に、所属校である京都光華女子大学で対人援助学会第 16 回年次大会が開催されました。所属校での開催ですから、必然的に大会の運営にも関わることになったのですが、共同大会長を社会福祉専攻の千葉さんが引き受けてくださったので、私自身は事務局スタッフとして裏方を担当させて頂きました。とはいえ、学会の大会事務局を担当することなんて今後もそうはないだろうと思ったので、今回は事務局として経験した大会について書かせて頂こうと思います。

開催前…無風の中の不安

今回の京都大会の開催については、昨年の広島大会の段階で既に決定していました。京都大会の事務局メンバーもその時に決まっており、京都光華女子大学の千葉さんと同志社大学の梁さんが共同で大会長を務めることになり、マガジン執筆者でもある坂口伊都さん（家族関係支援 憩都）と私が事務局スタッフという 4 人体制になりました。

学会の大会事務局を経験したことがないメンバーばかりの中、千葉さんは 2023 年の第 15 回年次大会にもスタッフとして参加しておられました。そのため、千葉さんのノウハウが頼りで、第 15 回大会の流れをたど

るように大会の準備を進めていくことになりました。今大会は京都光華女子大学が開催校であったこともあり、千葉さんにかかる負担が何かと大きくなる状況でしたが、私自身は自分の仕事にかまけて、大会準備が後手後手になりがちでした。

そんな中で、大会の 1 号通信の発行、2 号通信の発行と大会参加申し込みおよび研究発表や公募ワークショップの受付が始まりました。また、8 月には『京都大会プレ企画：社会的困難地域における対人援助の働きと可能性を考える～東九条の取り組みから学ぶ～』をカトリック希望の家こども園園長の叶信治さんを講師にお招きし開催しました。また、9 月には同じく大会のプレ企画として『精神医療現場における対話文化の取り組みから対人援助の可能性を考える』を精神保健福祉士である館澤謙蔵さんをお招きして開催しました。このように、着々と大会開催に向けての準備が進んでいきました。

そこからは、大会参加や研究発表、公募ワークショップへの申込状況にやきもきしながら過ごすことになりました。9 月下旬段階では研究発表の申込が数件しかなくテコ入れをどうしたものか…と悩み、開催 1 か月を切った時点での参加申し込みが 40 名くらいで焦り…ということを繰り返してい

ました。また参加者数が読めない中で、初日の夕方に開催する情報交換会の参加者も見通しが立たず、料理をどのくらい用意したらいいか…というお金が絡む中での葛藤事項もありました。

いろいろな心配ごともありましたが、研究発表とワークショップは申込締め切りの時点で想定より多くの申込があり、むしろ会場をどう確保するかに頭を悩ませる事態となりました。また、大会参加者も10月下旬には当初想定を超え、最終的には80名超の方にご参加頂くことができました。大会当日の学生スタッフも必要だと考えていましたが、本学の大学院生さんにお声かけしたところ、5名の学生さんが手を挙げて下さり、諸々の準備が整いました。私自身は大会事務局のうち、会計部門を一括で管理することにしたため、謝金や交通費等の準備を行いました。初日の夜の情報交換会の費用が2500円という設定になったので、お釣りが必要になるかも…と考え、念のため30人分の500円のお釣りを小銭で用意するため、日々の買い物をなるべく現金では、100円玉や500円玉をストックするようにしておきました。大会前日に、団先生の掛け軸展示を廊下に設置し、ポスター会場の机と椅子を別室に移動させてスペースを確保し、これで後は当日を迎えるのみとなりました。

大会当日…事務局ってバタバタなんですね

当日は時間よりかなり早めに現場に入っておきました。最初は受付の机など、前日には準備できなかった箇所を設置するくらいでのんびりとしたものでしたが、事務局メンバーが到着し、学生スタッフさんも来て

くれて…と人が増えるにしたがって、それぞれの人に渡すものや頼むことがあり、何となくバタバタとした動きになってきました。そんなことをしているうちに早めに到着された参加者の姿も見え始め、予定時間より早く受付を始める運びになりました。

受付を開くと、当日入金の方の対応や領収証の発行、申込や入金の確認が必要な方…など細々と確認や対応が必要な状況があり、おおむね受付に張り付く状況になりました。その後、開会時刻となり、開会あいさつや記念講演もスタートしたのですが、初日は大雨の影響で電車が遅延し、遅れて到着する方も少なくなかったため、なかなか受付から離れることができないまま、自分も関わる理事会企画の時間となりました。気持ちも含めて何も準備ができないまま会場に向かうことになりましたが、登壇者の皆さんのおかげで理事会企画はつつがなく進行できました。しかし、事務局ってやっぱりバタバタとするものなんですね…と改めて思い知りました。

情報交換会…生団先生だ！

そんなことをしているうちにあっという間に終わった初日。プログラムの合間の時間がやや短すぎて、教室の移動や機材のセッ



ト、お手洗いなどを済ませるには少し時間が足りなかった印象です。追い立てられるように次々に進行していく運びとなったので、もう少し時間に余裕を作った方がよかったかも…というのは反省点です。

情報交換会も、初日プログラムが終わってから 15 分後にスタートというタイトなスケジュールで、坂口さんに早めに情報交換会会場に控えて頂き、料理の受け取りから会場設営までやっていただいたおかげで、何とか定刻で進行することができました。情報交換会の参加申し込みは、プログラムの合間で受け付けるつもりがその時間が十分でなかったため、全然参加者がいないのでは…と恐れる事態となりました。結果的には、20 名の方にご参加頂くことができ、当初の予測の範囲内に収まりました。情報交換会会場には遅れて到着したため、既に会は始まっていましたが、何となく席の並びを見てみるとマガジン編集長の団先生の前に学生スタッフさんが座る配置になっていました。学生さんが「生団先生だ！」と声をあげたのを聞いて、そういえば授業の中で団先生の講演 DVD を使わせてもらっていたことを思い出し、私にとっての先生と、私にとっての教え子の顔合わせの機会を作れたことを知りました。なんというか、世代をつなげたような、時代をつなげたような、そんな気持ちになって、教員っていい仕事だなあと教員冥利に思いました。参加してくださった先生にも、学生さんにも、全てのめぐりあわせにも感謝します。

開催 2 日目、閉会と片付け、そして次回へ

開催 2 日目で今度こそ受付はヒマだろうと高を括っていたのですが、前日の豪雨の

影響で 2 日目からの参加に切り替えた方もあり、意外と細々と対応することがありました。お昼休みには理事会もあり、理事として参加しなくてはいけなかったため、「まあ大丈夫かな」と思って受付を空けたのですが、この間に来られた方がいたことも後から知り、おっかけで対応することとなりました。

そんなわけで 2 日目もあれよあれよという間に時間が過ぎ、無事閉会となりました。片付け作業は、無事に開催できた安堵感と祭りの後の寂しさが入り混じるような時間でしたが、学生スタッフさんのお力もあり、準備とは比較にならないほど短時間で終わることができました。改めて、研究発表やワークショップ、理事会企画に登壇くださった皆さんが来てくださったおかげだなあと想想し、学会に参加してくださった方あつての年次大会でした。参加してくださったすべての皆さんに心から感謝いたします。

既に次回大会に向けての構想も動き始めています。また、参加してくださった学生スタッフさんがマガジン執筆を始めるかも…？という動きもあり、いろいろと今後につながる展開が見え始めました。今大会で、私自身が果たせたこと、できたことは限られるのかもしれませんが、このような形で次に向けての動きを作り出すことにほんの少しでも関われたのであれば、大会事務局スタッフとしては本望だなあと想想します。また次回の大会で、皆さんにお目にかかれまして幸いです。次にお会いする時に、皆さんの前に立つのに恥じることがないように、自分の持ち場で、自分なりの実践を続けていこうと思います。